表紙：クラフト“五月晴れの空を翔るこいのぼり”
日差しが燦々と降り注ぐ５月の青空を、キンダーキッズのみんなが作ったこいのぼりが翔けていきます。
ひとつひとつの小さな鯉が集まって、大きな力強い鯉になって、
空を自由に泳いでいる姿は、まるで夢を追いかけるみんなのようですね。
その大きな目でしっかりと未来を見つめ、どんどん前へ進んでいるよ。
キンダーのみんなも、この鯉のぼりのように、お友達と手を取り合って、
楽しく、元気いっぱい、夢に向かって進んでいこうね！

アイデアを
お待ちしています！

「Hiraku」では、英語・幼児教育の
最新ニュースやトピックなど皆さまに
役立つ情報をお届けいたします。

- 最近気になっていること
- 取り上げてほしい話題
- 新しいコンテンツ　etc...

皆さまからのご意見・ご要望を
お待ちしています！

「Hiraku」編集部
TEL：06-6135-0150
Mail：hiraku@kinderkids.ed.jp

Hiraku
2024年5月発行　Vol.33
次回７月末
発行予定

株式会社キンダーキッズ
TEL：06-6135-0150
〒530-0033 大阪市北区池田町 3-1
ぷらら天満ビル 2F
www.kinderkids.com

未来をひらく 思いをつたえる

Hiraku

33

★リバプールFCサッカースクール天王寺夕陽丘校スタート！
★アドベンチャー/インフィニティアドバイザー長谷川絵里香氏インタビュー
★豊中校親子講演会　★西宮校卒園松蔭中学生が宝塚校で出張授業

日本の心と、英語の力。Kinder Kids inc.

キンダーキッズ天王寺夕陽丘校にて いよいよ始動！！

リバプールFC サッカースクール

共通の目標と価値観によるパートナーシップの実現

キンダーキッズとリバプールFCサッカーアカデミーのコラボレーションが、天王寺夕陽丘校でのリバプールFCサッカースクール開講という形で実現しました。3月の体験会が盛況に終わり、多くの在籍生および卒園生が受講し、好スタートを切ることができました。この新たな取り組みについて、清水代表から詳しいお話を伺いました。

代表　清水正和氏

プログラムの内容とその特色、強み

“LEARN TO PLAY THE LIVERPOOL WAY”

リバプールFCインターナショナル・アカデミーのトレーニングプログラムは、「Technical（技術）」「Tactical（戦術理解）」「Physical（身体）」「Social（社会性）」「Mental（メンタル）」の五つの要素を育成します。また、**リバプール独自のクラブ哲学「The Liverpool Way」**によって **Ambition（アンビション：夢や目標を持つこと）、Commitment（コミットメント：全力でやり切る力）、Dignity（ディグニティ：気品や立ち振る舞い）、Unity（ユニティ：仲間と協力すること）**の4つの価値観を学びます。プログラムは、リバプールFCアカデミーが世界レベルの選手を輩出した実績に基づいており、本国アカデミーと同様の環境を世界30以上の国と地域で提供しています。特に ①本国と同じ指導カリキュラムの活用 ②全コーチがLFCコーチアクレディテーションプログラムにより認定された専門知識を持つこと ③世界各地で同じトレーニングメニューを提供するための統一システムが整っていることが強みです。これにより、どこにいても本国アカデミーと同じ質のトレーニングを受けることが可能です。

リバプールFCインターナショナル・アカデミーの指導指針

“To be the world leader in the development of children through football”

リバプールFCインターナショナル・アカデミーは「フットボールを通じて子どもたちの育成において世界をリードする」という指導目的を掲げています。この理念のもと、サッカー選手としての技術向上だけでなく、コミュニケーション、チームワーク、問題解決、意思決定といった**ライフスキルの向上**を目的とした指導によって、人間としての成長を目指しています。

教育・育成方針について

“Long Term Player Development”

“Mistakes are a great opportunity for learning and improvement.”

リバプールでは「長期的な選手（子どもたち）の育成」を核としています。この育成方針では、サッカーをただ勝つことのみを目的とするのではなく、失敗や敗北を学びと成長の機会として捉えています。「**失敗は最高の学びの場**」との考えのもと、子どもたちの現在の目標だけでなく、将来に向けた目標へと焦点を当て、日々の接触や指導を行っています。このようにして、子どもたちが長期的に成長できるようサポートしています。

卒業生の進路について

リバプールでは、プロのサッカー選手になることがすべてと考えておりません。卒業後はＪリーグクラブの下部組織に入り、近い将来、プロのサッカー選手になるべく努力を続けている子や、高校サッカー強豪校に進み全国大会に出るような選手になるなど、サッカー面でも進路は様々です。リバプールでの経験を通して、イギリスや海外に興味をもち、中学からイギリス、スペインに留学された子どもや、最近ではカナダの大学に入学した子どもの報告受けています。将来は国際舞台での活躍が期待される卒業生も多くいます。

今後の展望や目標

リバプールFCはサッカーを通した子ども達の育成において世界的なリーダーになることを目標に掲げています。日本支部として、私たちは日本でのトップを目指し、拡大や成長を続けています。キンダーキッズとのコラボレーションが始まり、**「英語」「国際感覚」「国際舞台」**など、共通点が多い中での協力により、これからどのような相乗効果が生まれるか、非常に楽しみにしています。リバプール独自の哲学「The Liverpool Way」を体感しながら、クラブが目指す「選手としても、人としても成長する」をキンダーキッズの子どもたちに提供することで、日本を代表するような人材がここから誕生することを願っています。

コーチからのメッセージ

ケンタコーチ

リバプールファミリーへ
ようこそ！
元気よく、楽しみながら、
サッカーを学びましょう！

ノルディンコーチ

Welcome to LFC family!
Let’ s enjoy playing
football and learn to
play the Liverpool way.

＜お問合せご連絡先＞リバプールFCサッカースクール関西事務局
TEL:070-8972-1892（月曜～金曜 10:00-17:00）　※土日祝休　Mail:kansai@lfcsoccerschools.jp

アドベンチャースクール東京本校

開校1年を振り返って

～スクールアドバイザー長谷川絵里香さんインタビュー～

広々とした敷地内に木々が生い茂り、滝や池で思う存分水遊びができる。そんな恵まれた環境を最大限にいかした野外活動をこれまでのカリキュラムに更に加えた、「アドベンチャースクール」。このキンダーキッズの新しいスクールが東京本校でスタートしてから1年が経過しました。アドベンチャースクールのアドバイザーの長谷川絵里香さんに、この1年間を振り返っていただきました。

アドベンチャースクール／インフィニティ初等部　教育アドバイザー　長谷川 絵里香 さん

2016年から、岐阜県の「森のようちえん（里山や自然公園等を使い、主に3～6歳の幼児保育・教育、乳児親子向けのお散歩会を行う）で保育、フリースクールスタッフ、経営戦略、広報等を担い、現職理事。園の10年の軌跡をまとめた書籍『お母ちゃん革命』をポプラ社編集で自費出版。
2020年に子どもの進学のため長野県軽井沢町に教育移住。現在は野外教育、インクルーシブ教育のコンサルティング、研修、プログラム開発、デザイン、ライターなど幅広く行う。

自然への関心が育む子どもたちの感性

私が特に印象に残っているのは、秋の園外活動で子どもたちが自然に葉っぱに触れ、花の匂いを嗅いでいた瞬間です。春には自然に対してほとんど反応を示さなかった子どもたちが、**自発的に自然に興味を持ち、五感を通じて感じようとしている姿**に感動しました。
日常的には見逃されがちなエピソードかもしれませんが、以前の子どもたちは自然物を「景色」として捉えていただけで、積極的に関わろうとはしていませんでした。しかし、園庭の豊かな植栽とその中での活動を通じて、子どもたちは自然に対する興味を深め、自分の力で自然を感じる力を身につけています。
園庭には梅や柿、栗など多様な植物があり、それに引き寄せられて様々な鳥や虫も集まります。私がプログラムを行う際は、自分の発見や感動を子どもたちに伝え、彼らが自然を感じ、楽しむことを促しています。危険なものでなければ、植物や虫に触れ、匂いを嗅ぎ、その感覚を共有することを大切にしています。これにより、子どもたちは身体からの感覚を通じて自然を「感じる」ことを学び、園庭は学びの宝庫となっています。

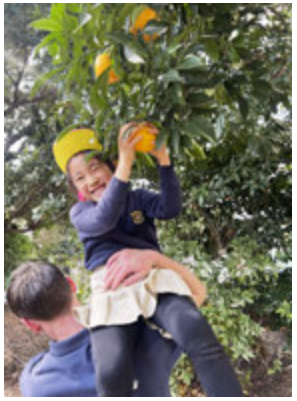
自然を活用した教育が子どもたちに与える影響と子どもたちの変化

私はこれまで、「森のようちえん」という、園舎も持たずに森の中で一日中、一年中活動する幼稚園で働いてきたので、自然の中で子どもがどれだけ豊かに遊び、学び、感性を開いていくかを見てきました。東京本校でも四季の変化の中で、子どもたちは遊び方を知り、自ら発見する力をつけていきます。当初、K1の先生から「おもちゃを使わない方がいいのか」と尋ねられ、自然物だけで遊ぶことを提案しました。半年後には、子どもの方から、自然の中での発見を報告してくれるようになりました。

例えば、ある子どもが椿の実を割って種を取り出す遊びを始めると、その爽快な音に他の子も興味を持ち、真似をし始めました。こうした体験から花や葉に興味を持ち、さらには**新たな発見や探究心が芽生える**ようになりました。子どもたちは自然物を使った見立て遊びも上達し、ケヤキの木の皮を見て「何に見える?」と問いかけると、即座に興味深い反応を示します。キンダーキッズの子どもたちの順応力と創造力には、特に驚かされています。

困難に立ち向かう力を育む自然体験

現在、まだ極端なアドベンチャーチャレンジは行っていませんが、徐々に冒険のレベルを上げていく予定です。予測不可能な困難に直面した際には、大人がすぐに問題を解決するのではなく、子どもたち自身に考えさせ、どうしたいかを尋ねています。正解を求めるのではなく、子どもたちが意見を出し合い、仲間や先生と対話することで、**コミュニケーション力と内面的な成長**を促しています。これを実現するためには、事前にリスクを想定・検討した上で、子どもたちが考え工夫できるだけの時間と空間の余白をつくることが重要です。今後、子どもたちの自然への耐性をさらに高め、圧倒的な自然に直面する経験の中で、どう足掻いても思い通りにならない存在があることを体感してもらいたいと考えています。例えば、突然の土砂降りの中で立ち往生するような状況です。このような経験は、困難な状況に直面した際に自己調整能力を養い、自然への畏敬の念を育むことに繋がります。ダーウィンの進化論でも述べられているように、強さではなく環境への適応が生き残りの鍵です。これからも、思考を転換させて環境と調和する力、変化を恐れず挑戦する力を、自然との関わりを通じて育んでいきたいと考えています。



自立心と社会性を育むアドベンチャースクールの取り組み

アドベンチャースクールでは、子どもたちが**「自己決定できること」**と**「協働すること」**を意識したプログラム設計をしています。カリキュラムは、時間的な余裕を持たせ、子どもたちが自由に議論や対話できるよう複数の選択肢を用意しています。例えば、秋のお月見団子作りでは、約40名の子どもたちが粉から団子を、タレも一から作りました。先生方には、極力手を出さずに子どもたちを見守るようお願いしました。

開始直後は混乱が見られましたが、次第にK3の子が「K2さんに先にやらせてあげよう」と提案するなど、自然に役割分担が生まれました。子どもたちは、自分たちで全てを成し遂げた達成感を感じ、非常にイキイキとした表情を見せました。大人が全てを決める方が効率的で完成度も高いかもしれませんが、それでは子どもたちが必要な体験を失ってしまいます。教育はサービスではなく、子どもたちが将来に必要な力を身につける場だと考えています。誰かが決めてくれるのを待つのではなく、自分たちで考え行動することが大切です。アドベンチャースクールでは、子どもたちが**自分の役割を理解し、他者と協力し、自ら解決する力を育む環境**を提供しています。これにより、社会性や自立心を効果的に育成しています。

課題を乗り越えた教育活動の工夫

2学年合同での活動は、人数の多さが課題でした。本来は半日以上かけてじっくり活動したいところですが、時間の制約がある中で、「とりあえず活動を行う」のでなく、深い体験に繋げるために、毎回何度も打ち合わせを行いました。先生方との綿密な打ち合わせに加え、子どもたちの現状をしっかり観察し、アセスメントを実施しました。準備段階でのシミュレーションを通じて、子どもたちにどんな体験を提供したいかを明確にし、プログラム当日には必要に応じて内容を調整しました。これが可能だったのは、共に活動する先生方がプログラムへの深い理解と協力を惜しまず提供してくださったおかげです。彼らの支えにより、困難を克服する大きな力を得ることができ、心から感謝しています。

子どもの成長を促す特別なプロジェクト

「園外探検」は、子どもたちで行き先を決め、行きたいところに行くというシンプルなプログラムです。行く場所がゴールと捉えがちですが、大事なのは、行く過程にどんな出来事が起こり、どれだけ子どもの感情が揺れ動く瞬間があったかです。

既存のカリキュラムがしっかりある分アドベンチャープログラムでは、「あえて与えすぎない」ことを大事に、子どもの内側から内発的な動機を引き出すことを大事にしています。実施する学年やグループの在り方をみて目的は多少変化させていますが、揉め事が多いほど、言語や思考をたくさん使うので結果的に子どもの力がとても伸びます。

未就学児にとって重要な心の土台づくり

アドベンチャースクールでは、自然から得られるリアルな体験や、チームで行うプログラムを多く提供しています。しかし、未就学児（乳幼児期）にとって最も重要なのは、学びそのものではなく、学ぶための心の土台づくりだと考えています。人は本能的に「よりよくありたい」「成長したい」「知りたい」「学びたい」と感じる生き物です。幼児期は与えられたものをどんどん吸収する時期ですが、大人は「できること・できないこと」（Doing）に注目しがちです。しかし、この時期に重要なのは、目に見えない土台、すなわち**「存在そのものに価値があること」（Being）**を子ども自身が実感できることです。これは、木の根が幹や枝葉を支えるように、大きな木ほど根を深く広く張る必要があるのと同じです。

アドベンチャースクールでは、自分自身を好きになること、愛されていると感じること、他者を好きで大切に思うこと、心から楽しむ体験をたくさん積むことを大切にしています。そのためには、**安心して失敗できる環境が必要**です。時にはハメを外したり、泣けてしまうこともありますが、どんな感情も人が生きる上で重要です。これらの感情を受け止め、子どもたちが安心できる経験を通じて心の根を育てることが、将来の学びに繋がる種まきになると考えています。

保護者や地域社会との絆を深めるアプローチ

保護者からは、子どもたちがプログラムを楽しみにしているという声や、アンケートでの好印象のフィードバックを得ています。梅干し作りや季節の実をエントランスに飾ることで、親子の会話が生まれているという声も寄せられています。園庭で拾ったものを使ったクラフトが増え、四季を感じる機会が多くなっています。また未就園児の保護者向けに**コミュニティカフェ**を開催し、スクールへの理解が深まり、今後も継続してほしいとの要望を受けました。

地域社会においては園外活動中に積極的に挨拶を行い、工事現場で働く人や商店街の人々との交流が増えています。子どもたちが英語で会話する姿に驚きの声も聞かれます。

ハロウィンの際には、スクール近くのおにぎり屋さんや、車屋さんにご協力いただきトリックorトリートを行い、ご近所の方と交流することができました。

これからのアドベンチャースクール―子ども主導のプロジェクトの推進へ

今後はさらに、**「子ども発」のプロジェクト**を推進したいと考えています。子どもたちには、自ら考え話し合い決定する力があります。決定することはその結果を引き受ける責任も伴い、必ずしも楽しいことばかりではありません。しかしこのプロセスを通じて大きな成長が期待できます。

一方で、先生にとっては教室内で行うよりも多くのリスクを想定する必要があり、チャレンジングな取り組みとなります。それでもこの取り組みには、子どもたちだけでなく先生にとっても大きな成長の機会が含まれていると確信しています。

常に進化するアドベンチャースクールの展望

アドベンチャースクールはまだまだ過程にあり、明確な目標やゴールに向かって進むと言うよりも、常により良くなるために進化し続けるスクールであろうとしています。

このアドベンチャースクールのプロジェクトは、私一人ではなくチームで行っています。私が経験してきた森のようちえん（野外保育）の経験はもちろん活かしていきたいと思っていますが、それ以上に大切なのは同じことをトレースするだけではなく**キンダーキッズのアドベンチャースクールらしい保育や教育とは何か**を、スクールの先生がみんなで考え実践していくことだと考えています。

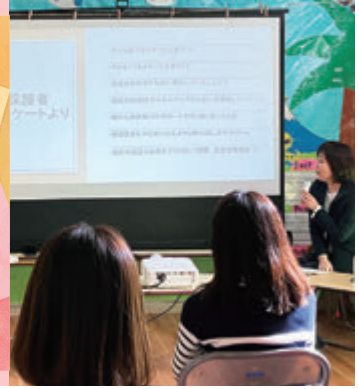
KINDER KIDS
International Adventure School

東京本校HP

卒園生親子 講演会

2/26（Mon.）豊中校

Guest Speaker : M.S.さんとご両親



キンダーキッズでは、保護者の皆様が**家庭での教育方針**や**お子様の将来の進路選択**に対する不安を和らげ、具体的なイメージを持つ助けとなることを目的に、卒園生と保護者による講演会を実施しています。**卒園後の生徒の歩みや進路決定に**おいて重視された点など、事前に参加者から集めた質問に基づいて、「子ども」と「親」それぞれの立場からの率直な意見を聞く貴重な機会を設けることができました。

［M.S. さんプロフィール］

2009年
豊中校卒園
Grad Clubに
G6まで在籍

公立の小中高に通い、
現在関西外語大学４回生
小６の時に母と双子のきょうだいと
共にカナダに1年親子留学を体験

Q.キンダーキッズに通って良かったことは?

A.［Mさん］ 英語は、外国人との自然な会話はもちろん、学校でのスピーチやテストが得意で、特にリスニングは他の人が苦労している中、あまり勉強しなくてすみました。また英語の本や歌の歌詞を原文で理解することで作者の意図や感情を感じ取れるようになり、多文化への理解や異なる価値観に触れるきっかけとなっています。映画を見る時も、英語のセリフと字幕の日本語を比べて「あ、こういう訳し方するんだ」「私はこう思うけど、こういう表現もできるんだ」といった新しい発見も多く、視野が広がります。

Q.キンダーキッズを選んだ理由と卒園後の進路選択時について

A.［お母様］ 私たち夫婦は子どもが生まれる前からインターナショナルの幼稚園に入れて英語力をつけさせたいと考えていました。幾つかのスクールを見学した結果、キンダーキッズが一番親しみやすさを感じたため選びました。小学校はインターナショナルスクールも考慮しましたが、子どもたちの地元での友人作りの願いを尊重し、公立学校へ。その後の中学、高校も公立に進学し、**地元での友人関係がとても充実**した学生生活を過ごせました。

双子のHくんと一緒に豊中校に通ったMさん

A.［お父様］ 私たちは子どもができた時に何を学ばせるべきかと話し合い、「英語だけはしっかり学ばせよう、他は何とかなる」ということで一致していました。**英語を学べば世界が広がる**と考え、小学生の間に必ず一年間海外に行かせようと計画を立てました。小学校については私立も検討しましたが、さまざまな環境の人と触れ合ってほしいと思い公立を選びました。地元の公立校に進学し、キンダーに通っていた頃とは異なる「大阪弁で話す友達」に囲まれる新しい環境に最初は衝撃を受けましたが、多様な人々と接する機会が得られ娘にとって良い経験になったと感じています。

A.［Mさん］ 公立学校への進学は、多様な背景を持つ友人との出会いとさまざまな性格や才能に触れる機会を提供してくれました。精神的にも強くなり、英語以外の多くの分野で自分の興味を広げることができました。

Q.留学の時期や行き先について、どのように決められましたか?

A.［お父様］ 周りにはインターナショナルスクール出身でも英語が話せない子もいます。その現実を見て、英語は続けなければ身につかないと痛感しました。中学や高校になって自我が強くなる前の小学生のうちに留学させようとずっと考えていましたが、あまり幼い時期よりもある程度の年齢の方が学ぶことも多いと考え、小学校六年生での留学を決めました。

A.［お母様］ 当初はハワイも考えましたが、日本人が少ないトロントを選んで親子留学しました。トロントは日本人が少なく治安も良好で、安心して留学生活を送れました。留学中は英語の長文理解に苦労し、複数の翻訳ツールを使って意味を推測しました。留学は小学6年の1年間で、帰国後の中学生活のキャッチアップも一苦労でした。しかし、多くの外国人との交流を通じて自己主張を強化し、元々自己主張が得意ではなかった娘が自信を持って意見を述べられるようになり、考え方もずっとポジティブに変わりました。

A.［Mさん］「小学生で必ず留学する」という方針で育ちましたので、留学が決まったときは自然な流れでした。帰国後は中学1年生の途中でしたが、小学校の友達と再会でき、すぐに学校生活に馴染むことができました。友達のサポートで部活や宿題にも追いつくことができ、地元の学校に通っていて本当に良かったと思います。

■将来の夢と親子の絆

［Mさん］ 長年学んだ英語とは異なる分野ですが、建築業界に進むことを決めました。最初は英語を活かす職業に就くべきかと悩みましたが、真剣に将来を考えた結果、父の仕事を見て設備設計に強く興味を持ちました。英語はビジネスだけではなく、**価値観を広げる手段**だと気づき建築業界を目指すことにしました。これからも英語を楽しみながら、生涯の財産として大切にしていきます。

［お父様］ 娘が設計の職を志した際、彼女の英語力を活かせる職業として、例えば京都で外国人旅行者向けに観光ガイドのNPOを立ち上げることを提案しました。しかし、彼女は自らの情熱を追求し、私と同じ設計の道を選びました。娘がこの決心を固めたとき、彼女は感情に溢れて涙を流しました。これは、親として期待していた道とは異なる選択にプレッシャーを感じていたからです。設計事務所は国内外に多く、彼女の英語能力を生かす機会も豊富にあります。私は娘が自分自身の道を見つけたことを心から支持し、全力でサポートします。親が思う以上に子どもたちは親の無言の期待を感じ取り、それに応えようとしていることを、皆さんも理解してあげて欲しいと思います。

何でも話し合える素敵な関係がとても印象的なご家族でした。
貴重なお時間をいただき、ありがとうございました。

松蔭中学校 ×
キンダーキッズ

英語でSDGsについて学ぼう！

2024.02.06［宝塚校］

**松蔭中学校3年生のみなさんが
キンダーキッズ宝塚校のK2及び
K3クラスの園児たちに対し、
SDGsをテーマにした英語の
特別授業を行ってくださいました。
メンバーの中にキンダーキッズ西宮校
（西宮北口校）の卒園生S.Tさんを発見。
「松蔭中学校 x キンダーキッズ」
特別授業の様子をお伝えします。**

松蔭中学校3年生（2月当時）
S.T.さん
キンダーキッズ西宮校
（西宮北口校）
2015年卒園

将来は語学を活かして
旅行や留学で海外に行き、
世界中の人と仲良くなりたいです。
バレエの先生やCAなど
英語を使う職業に就きたいです。

宝塚校施設長の母校・松蔭中学校との交流案から実現した出張授業

松蔭中学校・高等学校はキンダーキッズ宝塚校の施設長の母校です。今回の出張授業が実現したきっかけは、施設長が母校である松蔭中学校・高等学校が近年ますます英語や環境問題に注力していること、および近隣の小学校でSDGsに関連した出張授業が行われていることを知ったからです。その後、学生時代にお世話になった現在の校長先生と話す機会があり、英語教育の共通点を活かして「何らかの形で交流をしてみよう」という計画が浮上しました。キンダーキッズの子どもたちもテーマ学習の一環として環境について学んでいるため、生徒同士の交流を通じて、ただ勉強するだけではない有意義な時間を過ごせると考え、この交流が実現しました。

「楽しみながらSDGsを知ろう！」幼い心に響く授業

松蔭生の皆さんは授業の準備や実施に際し、幼い子どもにも分かりやすい内容を提供することに心を配っていました。
自己紹介からスタートした授業は、SDGsクイズや「Mr. Simon says」のSDGsゲーム、そしてみんなで歌う「It's a small world」など、多彩なテーマとアクティビティを用意してくれていました。
SDGsクイズでは、環境問題や世界の現状に関する問題を出題し、子どもたちが真剣に考える姿が見られました。特に印象的だった問題は"Are there children in different parts of the world who cannot go to school? Yes or No."（世界には学校にいけない子どもたちがいる）で、ほとんどの子が「×」と答えましたが正解は「〇」。世界には学校に行けない子どもたちもいることを知り、子どもたちから驚きの声が湧き上がりました。大好きなお友だちや先生たちと毎日遊んだりお勉強ができるという、自分たちが日常的に享受している環境の幸運さに気づき、その大切さを再認識できた問題でした。「Mr. Simon says」のSDGsゲームでは子どもたちの熱気が最高潮に！そして、「It's a small worldを歌おう」では、子どもたちはお姉さんと手を繋ぎ輪になって歌い、笑顔で一体感を味わいました。子どもたちは興味深く授業に参加し、アクティビティを楽しんだ後、お礼としてダンスや英語の歌を披露し、元気いっぱいに「Thank you！」の言葉で感謝の気持ちを伝えました。
松蔭生の皆さんの丁寧な配慮と準備のおかげで、子どもたちは楽しみながら多くのことを学び、素晴らしい体験を得ることができました。

今後さらなるSDGs教育の発展へ向けて

宝塚校では、今後もこのような授業を定期的に実施し、中学生との交流を恒例化していく予定です。また、宝塚市ではSDGsに関する動画やプレゼンテーションを募集しており、各幼稚園も応募が可能です。この企画を通じて、子どもたちが将来もSDGsに関心を持ち続ける大人になることを目指し、学年や学校全体での取り組みを検討しています。さらに園内では、学んだことを他の子どもたちに教える機会も設ける予定です。

今回の出張授業を振り返って

宝塚校 施設長
大倉 和花

キンダーキッズで働いていると、英語や世界について学んだ子どもたちが卒園後どのように成長し、どのような大人になるかを想像することはわくわくしますが、実際にその成長を目の当たりにする機会は少ないのが現実です。
今回、「母校との交流授業」では、私自身も自分の職場で、後輩たちが子どもたちに教える姿を見て感動しました。また、キンダーキッズの卒園生であるS.T.さんが学校の枠を超えて社会に積極的に働きかける姿を見て、感銘を受けました。キンダーキッズ宝塚校の子どもたちにとっても、このような有意義な授業が実現したことを大変嬉しく思っています。